

提

言

人びとの拠り所として 明るい灯をともし



大金義昭

食料・農業・農村ジャーナリスト

おおがね・よしあき／1945年8月生まれ。栃木県出身。早稲田大学第一法学部卒業。社団法人家の光協会職員として編集局長などを歴任。退職後はJICA（ジャイカ・国際協力機構）専門家として、日タイ経済連携協定プロジェクトに参画。タイ農協の「人的資源の開発・育成」に携わる。国内外で協同組合運動、教育文化事業・活動、人材育成・開発、戦後農村女性史などをテーマに講演・執筆。栃木県宇都宮市在住。著書に『楽しいJ A女性組織 あなたと仲間がきらめく25の言葉』（家の光協会、2015年）など、編著に『未来視座～J A TOP INTERVIEW＜現代農協人列伝＞①』（農協協会、2025年）などがある。

第30回J A全国大会は「組合員・地域とともに食と農を支える協同の力～協同活動と総合事業の好循環～」と題して決議をした。J Aの存在価値を高めるために、根本的な問いに立ち返ることが求められている。J Aの「強み」とは何か、そしてその「強み」や価値を支えるものは何か——。その問いの先に、協同活動と総合事業の実践がみえてくる。

■ J Aの「強み」って何だろう？

「コア・コンピタンス」というビジネス用語がある。「競合他社に容易に真似のできない中核となる能力」とか。J Aの「コア・コンピタンス」って何だろう。言い換えれば、J Aの「強み」とは何かということを常々考えてきた。「強み」はJ Aの基本的価値とみなすこともできる。

絞り込んで2つの「強み」を抽出し、J Aの「強み」＝「協同活動」×「総合事業」という算式を唱えてきた。組合員主体の「協同活動」と主に役職員が担うソフト・

サービス機能の「総合事業」を掛け合わせている。相乗・相補効果を期する掛け算だから、いずれが欠けても「強み」は失われる。しかも「強み」は放置すれば、たちまち「弱み」に転化する。

J Aを亡き者にしたい新自由主義勢力が、J Aの「強み」をよく知っていて“独禁法違反”や“信共分離”を振りかざし、正面攻撃を仕掛けてきた経緯もあるくらいだから油断がならない。「協同活動」しかり、「総合事業」しかり。「強み」を不断に鍛えたい。



直近では、大金さんが協同による地域社会づくりに尽力するJ Aトップをインタビュー取材したブックレット『未来視座～J A TOP INTERVIEW＜現代農協人列伝＞①』（農協協会、2025年）が話題になっている（写真左）

■「現状維持」より「未来づくり」

「役職員の人格以上にJ Aは良くならない」という名言を残したのは、長野県J A松本ハイランドの初代組合長・田中秀一（ひでいち）さんだった。今はその子息である均さんが何代目かの組合長を務めるが、J Aは衆知と衆力を結集する「全員経営」を目ざしてその名を全国に知られてきた。

組合員の参加・参画を職員がプロフェッショナルにサポートする関係は、支所協同活動運営委員会などからも窺える。そのための役職員・組合員教育に、J Aは長年にわたり手間も暇も金も惜しまずにかけてきた。

三重県J Aみえきたでは、組合長の生川（なるかわ）秀治さんが「人的資本経営」を掲げて「職員の成長こそがJ Aの価値であり未来です」と銘打ち、「自己改革」の先頭に立っている。「職員が幸せなら良い仕事をするし、職員が良い仕事をしたら組合員も幸せになる」と「未来づくり」に挑み、「前例がない。だからやる！」と日夜挺身している。

生川さんの「人的資本経営」は「人本主義」や「ナレッジマネジメント」（知識経営）などを彷彿させ、その突破力に役職員はじめ組合員が結集している。

いずれも『J A com 農業協同組合新聞』で連載中のシリーズ「未来視座 J A トップインタビュー」から拾ったエピソードだ。かつて筆者は『優れたトップダウンがJ Aを救う!!』と『ボトムアップが逞しいJ Aをつくる!!』の2冊（いずれも全国協同出版）を一对にして上梓したことがあった。ミドルクラスの「アップ・ダウン」も含め、J Aの組織・事業・経営は無から有を生みだす人財によって決まる。J Aの「強み」も人財によって支えられる。

■「新しい行動」に踏み出す！

「人が人として成長しない組織は成長しない」としたら、「人が人として成長する」ためにどうしたらよいか。自分にも言い聞かせ、人にも繰り返し語ってきた「氷山の一角」という寓話をひとつだけ披露したい。

海に浮かぶ氷山が海上に姿を見せている体積は全体の数パーセントにすぎず、残りの九十数パーセントは海面下に沈んでいる。脳科学の知見によれば、現にいま発揮している人の能力もこの「氷山の一角」のように全体の数パーセントにすぎず、残りは潜在能力として眠ったままの状態だという。いずれも聞きかじった話だが、それでは、未だに使われることなく眠っている大半の潜在能力をいかに「見える化」するか。

考えあぐねた末の結論はこうだ。人それぞれにそれまでにとったことのない「新しい行動」に踏み切る以外にないということである。「新しい行動」には不安やリスクが伴う。その不安やリスクを振り切る勇気を持ちたい。しかも勇気は元気・やる気・本気と同様に周囲に伝染する。「新しい行動」に踏み切る勇気が、人に限らず組織や地域の潜在能力を新たに開発する。

人口減少社会の中で内に暗く閉じこもるのではなく、外に明るく開かれた「新しい行動」に挑んで関係人口を拡大し、“絶滅危惧種”に追い込まれている農業や農村を救う。そのためにＪＡの「強み」＝「協同活動」×「総合事業」をいかに実践するか。

「令和の米騒動」が明らかな失政の産物であるにもかかわらず、“ＪＡ悪玉論”がまたぞろ幽霊のように社会を徘徊している。「食と農」をめぐるそんな“黄昏時”だからこそ、協同組合の基本的価値に腰を据えたＪＡの「強み」を鍛えあげて明々と灯をともし、人びとの拠り所として愛され、尊敬されるＪＡを目ざしたい。